学校の中のもう一つの空間

東京大学教育学部附属中・高等学校副校長　蛭　田　かほり

引き戸の入り口は大抵開いていて，薄いカーテンが風にそよいでいることもある。中をのぞくと，何かいつもの学校とはちがう感じがする。何がちがうんだろう，と確かめようと一歩踏み込む。足元はピンク系のじゅうたん，カウンターの上に小さな遊び道具が並ぶ。左手横の棚には絵本や単行本，上には大小のぬいぐるみがいくつも置かれている。その奥の壁には落書きし放題のホワイトボード。部屋の中央に楕円形の年代もののテーブルと丸いいすが数脚。右手奥に座り心地のよさそうなソファーが二つ並んで，大きな焦茶色のテディベアがいつもどこかに座っている。

奥には一人がけの小さなソファーがふたつ。窓ぎわに箱庭づくりのできる砂場があってたくさんのパーツが専用の棚に並んでいるので，つい手を出したくなる。

反対側の窓ぎわには，これまた年代ものの木のどっしりとした机があって，いつも誰かがいて声をかけてくれる。

「ほっとルーム」は，その名の通り，生徒も教師もともに肩の力を抜いて「ほっと」できる空間である。

学校には，教育のための機能と効率に見合ったさまざまな施設や空間が存在するが，そこはあくまでも学ぶ場であり，真剣勝負の場でもある。また自己を解放したり，息を抜いたりできる場でもなければならないのだが，なかなかそれができにくくなってきている。授業で緊張を強いられるだけでなく，人間関係にも気を配らなければならないストレスのために疲れると言う生徒も多い。多様な問題を抱えている生徒を，教師の力だけでは背負いきれなくなっている。

そのような現場からの願いと軌を一にして，大学の学校臨床総合教育研究センターの分室が設立されることになった。分室には，臨床心理学の亀口教授をはじめとして，助手の堀田先生（後に大矢先生にかわる）や院生の高橋さんたちがかかわってくださることとなった。専門家の参加と支援は何よりありがたく，教員の視野も広がるだけでなく，保護者への働きかけも多様となって，問題解決への道筋が多くなってきた。

本校の研究員である高橋教諭の努力もさることながら，「ほっとルーム」の開設にあたっては，センター長の近藤教授をはじめ諸先生方に，保健室との協力をはかったり，教員との意思の疎通等の問題を解消するための会合をもったりと，慎重に，かつ丁寧に事に当たっていただいた。研究会も繰り返し行い，「ほっとルーム」の役割や，生徒たちへの姿勢，教員との連携協力態勢等が次第に見えてきた。生徒たちも，最初はおずおずとではあったが，自分たちの心を解放してもよい場所なのだと分かってきたようであった。

はじめは女子が多く訪れたようだが，今では男子も劣らず部屋に入ってくる。落書きボードに思いっきり絵を描く子，黙って自分の大きさほどのテディベアを抱いて座っている子，箱庭を毎日のように作り替える子，相談に乗ってとやってくるグループ。こんな生徒たちにとって，「ほっとルーム」は心をあずけられる空間なのだろう。すなわち，そこにいるだけで，何も繕わなくても安心していられる場所。自分が自分でいても許される場所。

ここは，いつの間にか学校がその機能の中からとり落としてしまった空間であり，けれどもきっと，学校にとってなくてはならない大切な空間なのだろう。